

書評

月野楓子『「よりどころ」の形成史：アルゼンチンの沖縄移民社会と 在亜沖縄県人連合会の設立』（春風社、2022）

謝花直美

沖縄県内の新聞社は南米や北米、アジアにいる沖縄系移民に海外通信員をお願いしている。かつてデスクとしてまとめ役をしていた時に、「世界のウチナーンチュ大会」の年にあたり、海外通信員の方々を社内会議で受け入れたことがあった。国際通りのパレードでは沿道から声援を通信員の方々に送った。その一人アルゼンチン通信員だった「らぶらた報知」の故・崎原朝一さんが満面の笑顔で手を振ってくれたことが思い出に残る。沖縄戦の疎開先から戻らず新移民として1950年代にアルゼンチンへ渡った。県系の人々の活躍を温かく見守り、歌人としても知られた。崎原さんの笑顔に答え、私は「お帰りなさい」と声をかけた。私にとって印象深い思い出は、月野楓子著『「よりどころ」の形成史』を読み、移民の体験を世界で活躍するうちなーんちゅという物語に押し込めてしまう理解だったと気付かされた。移民の姿を通して、移民先の日系人社会がぼつんと空中に浮かびように独立したものととらえ、移民先の国家や社会、地域との関わりを問わず理解していた。沖縄と移民の方々の関係を一方通行的なとらえ方によって見ていたのだ。

同書によると戦前アルゼンチンへ渡航した5,398人、うち3,795人が沖縄移民であった。ブラジルからの転住で始まる同国への移民は、アメリカやブラジルの移民制限の関係や、欧州移民を主としていたことなどから日本の契約移民や集団移住をよしとはしなかった。そのため移民は個人の「自由移民」、親族・知人による「呼び寄せ」という形をとったという。

送出県沖縄からの大きな物語に沿って見える移民社会を、著者は記述の軸を縦横に広げ、国家や地元の社会との関係の中で、移民の姿を描きだす。移民たちに影響を与えた国家の政策、エビータによって日本でも名前が知られるペロン大統領夫妻と日系人社会の意外なつながり。日系人社会の内部の格差、移民自身の第二次世界大戦と故郷沖縄戦を巡る戦争体験、それに基づく救済運動。国交断絶による移民受け入れ中止、戦後の新しい移民たちと戦前移民の葛藤。こうした関係性のなかに浮上する困難に向き合うために、著者が「よりどころ」とよぶ人々のつながりがつくられていく。それは、アルゼンチン沖縄移民で結成した様々な団体として現れる。多くは「沖縄」という名前がついた様々な団体だ。しかし、著者が着目するのはその形成過程である。著者は、その意義を次のように表現する。移民の「生活は時に場あたりのかつ非戦略的なものであり、言葉、生活、仕事、全てが異なる環境の中で生きていくために彼らは手

を結びあった。その結果としてあらわれてくるのが社会組織や様々な団体である」。著者が「よりどころ」として表現するのは、移民したその場所で生き抜こうとした人々のつながりであり、それが様々な活動を通して社会に見えるようになった移民たちの生きる場なのである。

こうした団体はこれまで移民のアイデンティティーの高揚と紐帯の強さとして理解されてきた。そのため時として、故郷を想う強さがナショナリズムと同一視されて、克服されるべきものだと考えられることがある。しかし移民たちはその出自や自己認識、さらに移民たちの活動に内在するものによってあるのだと著者は指摘し、その「思い」をも含めて「よりどころ」を考察する。

例えば移民初期、労働者が多かった「沖縄県人会」は階級と出身地への差別から、移民受け入れ中止を懸念した日本公使館により「在亜日本人会」に合流させられた。しかし、その後に沖縄系移民は移民三大職業である洗濯業・花卉栽培・蔬菜栽培へ進出する。そして特に花卉栽培の組合が「よりどころ」として人々が安心して集まれる場、情報を発信する場となったという。

第二次世界大戦では、アルゼンチンの政策の変化によって、日系移民は「敵国人」となり、さらに戦線布告によって国交は断絶し移民受け入れは途絶えた。北米のように強制収容など厳しい対処がなく在亜邦人への迫害は「緩やか」であったことが、戦中から戦後にかけての移民たちの在り方を規定したという。この時、国家の監視に対し、それに対応するため花卉組合は「隣組」を作るが、それは同時に生き抜くための協力体制ともなった。

同時期、発効が禁止された邦字紙の代わりに現地紙を通して第二次世界大戦、沖縄戦の戦況を把握したという。そうした状況の中から最初に結成された「日本戦争罹災者救恤委員会」の沖縄移民が、沖縄への支援を中心に行うことを決め、「沖縄救済会」が結成された。沖縄の移民たちをまとめる役割を果たす。チャリティーのために沖縄の文化や芸能が前面に打ち出され、「沖縄舞踏協会」による活動は邦人社会における「沖縄」の位置を向上させた。

救済活動を源流とする「沖縄救済会」「沖縄音楽舞踏協会」、一世と戦後移民の融和を目指した「南郷体育倶楽部」は、活動内容がそれぞれ異なりながらも「県人社会」を基盤とした。戦前の関係性を再構築し、協力することで「在亜沖縄県人連合会」が結成されていったという。「連合会」と名乗ったように、移民たちの自己認識がすぐに「沖縄人」となったのではない。先の三団体にさらに小さな会などを包含し、つながりがより上げられていった。沖縄移民を主読者に創刊された『らぶらた報知』が伝える米軍占領下の沖縄の帰属問題も「在亜沖縄県人連合会」の大きな関心事項となった。移民国で生き抜こうとした人々の生存の有様が「よりどころ」を通して鮮やかに浮かびあがってくる。

著者は、聴きとられにくい女性の声も描きだしている。女性たちは移民後の不安定な生活で、家庭の仕事に留まらず、労働者としても忙しく働かなければならなかった。そうした女性たちこそが、移民社会を支えことを示した。移民の語りの中でもそこにジェンダー差があり、聞き

取られない声を意識しなければならないことを示した。

「海外雄飛」「世界のウチナーンチュ」。送出島の沖縄県でこうした言葉とともに移民を巡る物語は広く共有されている。しかし、冒頭に書いたように、そうした理解だけにとどまれば、移民の人々の生存を単純な物語に押し込め、送出島の物語に回収するだけだ。移民の方々の複雑な生存の形を受け止めることが必要なのだ。著者の「よりどころ」という視点は、移民の方々とどまらず、戦前から戦後を通して移動を繰り返した沖縄の人々の生存を考察するのに示唆的だ。筆者は沖縄戦に端を発し、米軍による収容、米軍用地接收によって移動を繰り返した人々を考察してきた。しかし、地域誌の記述は土地を係留点にしており、移動した人々は、海外なら移民、日本本土なら県人会、沖縄県内における郷友会などにカテゴライズされる。こうした団体もまたアイデンティティーの強さに着目して記述されてきた。しかし、そのつながりは元々は労働や互助を通して生き抜くためのものだ。こうした人と人とのつながりを「思い」とともに「よりどころ」として記述することは、移動の流動性ゆえに消えてしまったつながりを、私たちの目の前に生きたつながりとして、眼前化させることが可能になるのではないか。それは確かな共助の記憶として、現在を生きる人々をも支えていることを示せるのではないだろうか。

